

・夫婦関係の実態

夫婦に諦めムードが漂い、それぞれ別々の世界で孤独な日々を送る。生活の便宜的な面だけで関係を続けるという形骸化した結婚生活を営んでいる。

「毎日、夫は勤めが終わると、まっすぐわが家に帰ってくる。私が料理した食事を黙々と、私とほとんど言葉も交わさず食べている。そんな夫を見ていると、夫は単に動物に見えてくる。まるでペットみたいに。目の前にいるこの人は、いったいだれなんだろうか。私はなんのために、この「ペット」に料理を毎日作っているのか？」

「離婚したい理由はただ一つ。夫が退屈だからです。別にどこが悪いのかと聞かれると困る。私も、夫のおかげで何不自由なく生活している。でも、毎日が味気ない。夫は、まるで塩気のない漬物。人間として面白くないんです」

「私たちは何のために結婚しているのか」という問い

・離婚原因

今日の妻たちが掲げる離婚原因を考えてみると、先にも述べたように、「心が合わない」「人間的に魅力がない」「なんとなしに面白くない」「セックスに満足しない」「人生を共有している実感がない」「生活面で自立していない」などといった、人間としての営みの根源において何か満たされないものを感じ、それに耐えられないと感じているからなのだと思う。

・何を求めて結婚

今の女性は何を求めて結婚するのだろうか。経済的な安定か？ たしかに、それはある。婚前カウンセリングや婚前講座の席で、「あなたは、なぜ結婚することにしたんですか」という私の問いに、さまざまな答えが返ってくるが、中には、「やっぱり、**経済的な安定**です」と答える女性もいる。正直な答えだ。

その他もろもろの答えと共に、「精神的な安らぎを求めて」と大多数の女性は答える。それもうなずける。

一方、男たちは何を求めて結婚するのだろうか。女性に対してと同じように結婚する理由を尋ねると、不思議にも、女性と比べてすぐ答えられない者が多い。

「なぜこの女性を結婚の相手に選んだのではなく、なぜこの女性と結婚するのですか？ つまり、**何のために結婚するんですか？**」

と問い直す。すると、

「いや、そんなこと、あまり考えたことなかったのだから……。好きな女と一緒にいる。それでいいんじゃないんですか？好きな女と出会ったから、結婚を考えたのであって、結婚したいと思って、その相手を探したんじゃないんです」

と問い返される。

「いい悪いじゃなく、あなたは何のために結婚するのか、何を結婚に期待するのか、きっとあるはず。それを自分がわからず、また、それを相手がわかっていないまま、結婚したらどうなるのか、それが、私には心配なんだけど、**なぜ結婚するのかが明らかになれば、なぜこの人と結婚したのかが明らかになると思うんだけど……**」

こんなやりとりがつづき、男性から、結婚に寄せる期待を聞き出すのに一苦労する。

・夫たちの態度

わが国の夫たちには、夫婦関係にあまり多くの精神的な投資をしていない者が多いようである。欧米人に比べて、精神的投資の度合いははるかに少ないように思える。いわゆるコミットメントが少ないのである。コミットメントとは、「個人の価値判断に基づき、決意し、約束したこと、表明したことを忠実に守り、実行するための努力をすること、自分を拘束すること」と定義

できよう。つまり、日本の男たちの結婚生活や夫婦関係に対する価値づけが低いのだ。

結婚がもたらすさまざまな便宜は享受しても、夫婦関係に心的エネルギーを費やす必要を感じないのであるから、自律的に自分を拘束しない。もちろん、そのために夫婦が一緒に過ごす時間を多く持つ必要も感じないわけである。

このようなわが国の夫たちの結婚生活や夫婦関係に対する態度は、わが国の文化的特徴を反映している。たとえば、欧米人と比べて、わが国の結婚には、結婚を契約として受けとめる意識が少ない。

そのちがいは結婚式によく表われている。欧米人の結婚式においては（特に、キリスト教式において）、これから結婚する男女の誓約（神と証人の前においての）が中心であるのに対し、わが国の結婚式（特に神前結婚式において）は、縁による男女の出会いと結婚を強調する。

この両者のちがいは、後者は「過去との関わりにおいての今」、前者は「将来に向かっての今」に焦点が合わされていることにある。

・伝統的な男性優位の価値観

母親に家事の手伝いから一切解放され、大事に育てられたわが国の男性は、生活の世話の一切を妻に依存する。加えて、伝統的な男性優位の価値観に固執し、自立性を欠いた大人としての生活の未成熟性に気がつかないばかりか、そのことに問題意識を持たないのである、

・フロムの説

愛は、愛する対象の生命と成長への関心と配慮、相手のニーズへの応答、相手の存在そのものへの尊敬、相手の中核においての理解を求めるといった行為によって示される、というフロムの説に私は共鳴する。

・「愛し方」の技能を育てるには訓練が必要

愛の知恵や技能を、どこで、どのように学ぶのだろうか。

多くの人は、そういう知恵や技能を身につけないまま結婚する。そして、自分なりの方法や形で、愛し、愛され、傷つけ、傷つけられるといった経験を通し、試行錯誤をくり返しながら学んでいくのだと思う。

たしかに経験を通して学ぶということはある、また、そのことの価値は大きい。しかし、愛の関係を育てるのに必要な知恵や技能は、未知のまま結婚し、試行錯誤の経験によって身につけるよりほかに通がないのではない。

そういった「自然に身についていくもの」であるといった考え方には、私は賛成できない。結婚する前に、そして結婚した後にも、自分たちの愛し方をふり返り、不健全なあり方、欠けているものに気づき、洞察を深め、健全な関わり方や、必要な要素や能力を育てるための学習や訓練は欠かせないのである。

・一緒に時を過ごす意味がない

自分の結婚観や夫婦観が明瞭でなく、明らかにされず、双方のすり合わせがなされないまま、双方の条件が合っているとか、その時のムードや、早く好きな相手と一緒にになりたいという願望にとらわれて結婚生活をスタートしたカップルは、行き先不明の「結婚という名の電車」に飛び乗ったようなものだと思う。

東京の山手線に乗ってピクニックに興じている状況に例えられようか。初めは楽しいが、やがて行き先がなく、同じところを堂々巡りしているために退屈してくる。また、先が不安になってくる。そして、お互いの欠点が目につき、不安になる。

隣りの人と話し始める夫に、「こっちを向いて、私と話をして！」と不満を言い、隣りの車両に行ってしまった夫に、「こっちの車両に私がいることを忘れないで！」と叫ぶ。

では、同じ車両の中で、隣りに坐り、一緒に弁当を食べていれば、それでよいのだろうか。そうではない。何のために一緒にいるのか、何を語るのか、どこへ行きたいのかが明らかにされていなければ、一緒に時を過ごす意味がないのだと思う。

・変わらない夫への対応パターン

(1) 欲求不満型

変わらないことでヒステリー、家事放棄。

(例) 友人に誘われ二泊三日の旅行をすることになった。しかし、その間の夫の何回かの食事は用事して出かけた。

その旅先から、夫にA子さんは電話した。すると、風呂桶の垢を洗い落としてなかったと叱られた。「外に出かけるときは、オレに迷惑をかけるな！」と怒鳴られた。A子さんは、「次は気をつけます」と謝った。

しかし、A子さんは内心自分が入る風呂桶の垢一つ自分で洗えず、それを迷惑だと考える夫に不満を感じる。そして、これからのことを案ずる。今、自分は健康であるからいいが、病気で床につくようになったらどうなるのか。夫はどうなるのか、そして、自分は？

こうして、A子さんは二人の将来を心配している。かといって、真剣に夫の自立を促す努力をしていない。夫の身のまわりの世話をすべてしつづけることが、夫の自立を妨げていることに、本当に気がついていないのだ。そして不満を募らせ、時には我慢できなくなりヒステリーを起こす。

しかし、夫が自立できていないことに不満を感じ、不平を口にしたり、ヒステリーを起こすだけでは問題は解決できない。なぜ自立できていないのかを考えねばならない。また、どうすれば自立できるようになるかも考えなければ、そして行動で示さなければ問題は解決しないのだ。夫にも家事の一部の責任を負わせることも必要なのだ。

(2) 諦め型

不満、いらだちをぶつけるが、やがて諦めてしまう。

(3) 忍耐型

いつかは変わってくれるだろうという期待を持っている。

(4) 脅迫型

夫の嫌がること、恐れている行動をとることをほのめかして、夫の変化を強いる。

(例) Eさんは夫が浮気した(?)ことを知って動転した。夫は浮気を否定したが、Eさんは、はっきりした証拠があるといって夫に迫った。それでも夫は、それは誤解だと主張した。

夫の浮気の実事を確信するEさんは、夫が浮気を認めて、謝らないかぎり、夫との性生活はできないと、夫の要求を拒みつづけた。それなら、ほんとに浮気してやろうと、夫は浮気した。夫は浮気したことを公然と認め、妻に告げた。しかし、妻に謝ることはしなかった。妻は激怒し、こんどは夫の両親に告げると脅かした。夫は両親に知られるのは困ると考え浮気をやめることを約束したが、陰で浮気をつづけた。夫の浮気がやまないのを知ったEさんは、夫の両親に告げ、夫に過ちを認めさせてほしいと頼んだ。

両親に呼び出された夫は、妻の嫉妬ぶかい性格や、性生活を拒まれつづけたことに端を発し、浮気に走ったことを話した。Eさんは夫の両親に呼び出され、妻としての資格がないと責められ、離婚を言い渡された。

(5) 気晴らし型

・友人と時間を過ごす、スポーツに興じる、映画を見るなどして、ネガティブなエネルギーを発散させたり、昇華させるようなもの。

・衝動的にクレジットで高価な買い物をして、後で支払いに苦しむとか、一時的な気晴らしのつもりの浮気の相手と複雑な関係になり、夫婦関係を脅かすような結果を招くといったようなもの。

(6) 八つ当たり型

怒り、敵意を夫にぶつけず、他の人に向かって表現する。

(7) いやみ型

(8) うつ型

鬱積した怒りや憎しみは、やる気を減退させ、憂鬱感を募らせる。

(9) 他人依存型

友人に慰めを求める、宗教に帰依して心の安らぎを得る。

(10) 受容型

K夫人（三十五歳）は、スキンシップをいやがる夫に不満であった。K夫人の方はスキンシップを好むタイプ。両親が子供の前でよくキスするのを見て育ってきた。

夫の方は反対に、結婚したら、スキンシップは避けられないので、仕方なくするといった感じで、結婚した当初は、妻の手を握るのも抵抗があった。結婚して一年ぐらいして、かなり馴れ、街を二人で歩いている、妻に腕を組まれるのをそんなにいやがらなくなった。

妻は、いい線をいっていると思っていたが、やがて、体が触れ合うのを夫は避けるようになり、結婚して七年の今は、セックスも、顔を合わせる体位は避け、しかも、数分で終り、さっさとパジャマを着て、背を向けて眠ってしまうという。

もちろん、K夫人はそんな夫にいたく不満である。だが、育ちのちがいを考えれば、自分と同じような行動を要求したり、期待するのは無理だと悟った。そうしたら、少しは気持ちが楽になった。

結婚記念日に、K夫人の希望により、かつて結婚前に何回か食事をしたことのある思い出のレストランで食事をし、その後で、よく二人で歩いた街を散歩した。腕を組み、肩を寄せ合いロマンチックな気分浸った。その夜、抱き合った二人は何年かぶりのエクスタシーを味わった。その時以来、まるで何かふっ切れたように、夫はスキンシップをあまりいやがらなくなったという。不満な面もまだあるが、一度ですべてうまくいくとはかぎらないので、夫を理解して忍耐強く努力しようと思っている、という。受容型の典型的な例である。

(11) 自己改革型

(12) 放棄型

・ 変わらない夫の心理

- (1) 「問題意識が無い」無関心型
- (2) 「意志が弱い」意志薄弱型
- (3) 「恐れている」不安型
- (4) 「意固地である」頑固型
- (5) 「やる気がない」挫折型
- (6) 「いつかやると言って逃げている」引き伸ばし型
- (7) 「変えられないと思っている」責任転嫁型

・ 変わる夫の心理

- (1) 「変えたいと思えば変わる」
- (2) 「過去は変えられないが、今は変えられる」
- (3) 「危機感があれば変わる」

・ 「自分が変わる」ことで「夫が変わる」

人間には他人を変える力はないのである。人間にはそんなパワーはない。妻がいかにパワフルな女性であっても、夫を変えることなどできはしない。そもそも、夫を変える、他人を変えられるなどと考えるのは、はなはだ不遜なことであり、また、不可能なことなのである。

しかし、「自分が変わる」ことで「夫が変わる」ということは起こりうることであり、また、期待してもよいのである。それは、変化した自分を見て、また、変化した自分によって生ずる夫への対応の仕方や夫への態度が夫婦関係の変化をもたらし、それに対する反応として夫が変わることが起こりうるからである。つまり、夫自身が自分を変えたいと思ったから変わるのであって、妻によって変えられたのではないのである。

・ 結婚の幸せを相手まかせの姿勢

世の中には、プロ意識を欠いた「腰かけ、的OLが多いといわれる。そういうOLが、運よく(?)巡り合った男性との結婚にゴールインする。それもプロ意識を持たずに、自信もないまま、ただ甘い幻想に浸り、「きっとこの人なら私を幸せにしてくれる」といった、結婚の幸せを

相手まかせの姿勢で結婚生活をスタートする。

こういう女性ほど、結婚がもたらすさまざまな便宜だけに目がくらみ、とらわれてしまう。より多く便宜を提供してくれる相手、そういう条件に合った相手に巡り合った時に、そのことに目がくらみ、心が奪われ、きっと大事なことが忘れ去られてしまうのだろう

・山あらしのジレンマ

この結婚が孕んでいるジレンマは、よく「山あらしのジレンマ」と呼ばれている。山あらしのカップルは、寒さを凌ぐために相手に近づくが、近づくとも相手の体のトゲで傷つく。同じことが相手にも生ずるので、お互いに身を引く。しかし、離れていると寒いので、温かみを求めて再び近づき合う。そして、傷つき、再び離れるという行動をくり返す。

男女の営み（結婚にかぎらず、緊密な人間関係のすべてにおいて）も、これと同じように、近づいては傷つき、離れては、再び近づき合うということをくり返している。傷つき合いを止められず、**相手が「要る」から、相手と共に「居る」**。これが結婚生活を営む者が避けることのできないジレンマなのである。

自分のトゲに気づいて、コントロールする。

自己変革を拒む者は、結婚の適性を欠いている。

プラスのストローク（相手が喜ぶような表現）

フィジカル・タッチでも良い

・自己本位の愛し方

愛には、「私はあなたを必要とする（経済的安定、心理的安定など）ゆえに、あなたを愛する」といった自己本位の愛し方がある。誰にも多少はある愛し方である。だが、それが「私はあなたを愛しているので、あなたを必要としている」といった段階に高められて、愛は成熟するのだと思う。自己中心から、相手中心に成長したときに、愛は完成するのだと思う。

・自分の愛し方

「夫は私を愛してくれない」と言う前に、また、そう信ずる前にまず、「夫に対する私の愛はどんな愛なのか」、「どんな愛し方をしているのか」と、自分の愛し方の実態を確かめてみる必要があるはしないだろうか。